

## ボーダーを観る、ボーダーを知る ～GCOE サマースクール根室・羅臼巡見参加記～

GCOE サマースクールの終盤、8月6日（土）から7日（日）の日程で、根室・羅臼巡見を行った。その目的は、歯舞諸島の貝殻島からわずか3.7キロしかない根室市を訪れ、北方領土問題についてボーダーの現場で学び、また、羅臼では26キロしか離れていない国後島を実際に目視することで領土問題を体感することであった。

6日（土）朝9時に根室中標津空港に降り立った巡見参加者18名（うち、センター以外の外国人参加者11名）は貸切バスで約2時間かけて北海道立北方四島交流センター（通称、二ホロ）へと向かった。二ホロでは、まず長谷川俊輔・根室市長に北方領土問題解決に向けた熱い思いを語っていただいた。中でも、漁業を基幹産業とする根室市にとって、領土問題が大きな経済的足かせになっているとの話が印象的であった。その後、GCOE作成の「知られざる北の国境 千島・樺太」DVDを視聴し、井濶裕・GCOE 学術研究員による大黒屋光太夫以来の北海道を中心とする日露交流史についてのレクチャー、岩下明裕・スラブ研究センター教授による北方領土問題の現況に関するレクチャーがあり、外国人参加者からは数多くの質問と活発な議論がなされた。二ホロの北方領土関連の展示では、外国人参加者が学芸員の方の解説に熱心に耳を傾けていた。



その後、我々一行は根室市歴史と自然の資料館を訪問した。港に所狭しと漁船が並ぶ根室市の最盛期の写真展示が印象的であった。そして、初日の一番の目玉である日本の本土最東端、納沙布岬視察へと向かった。しかし、根室半島を奥へ奥へと進むほど霧が濃くなってゆく。歯舞漁港を過ぎる頃には視界がほとんどない状態。残念ながら、目視でも望遠鏡でも北方領土を目にすることはできなかった。このような濃霧は8月ではごく当たり前のことである。

初日の晩には、石垣雅俊・根室市副市長ら根室市職員の方々も交え、根室市内のレストランで会食をした。ここでも、職員の方々は北方領土問題に関する外国人参加者の質問攻めにあい、私自身、つたない通訳に奔走した。一つ、印象に残った質問を紹介したい。「北方領土に住むロシア人と旧島民はお互いをどのように感じているのか」というものである。根室市役所の方の回答は、「旧島民はソ連によって追放された人々であり、移住してきたロシア人の多くはやむを得ずやってきた人々である。ほんの数年であるが一緒に暮らした経験もあり、相互が決してお互いを嫌悪しているわけではなく、お互いがお互いを理解し合うという雰囲気はある」というものであった。これは長いこと首都圏で暮らしてきた私が

抱いてきた印象とは大きく異なるものであった。

7日(日)は、今度こそ北方領土を目視すべく、知床半島の羅臼町へと向かった。途中、別海町尾岱沼港から野付湾内のクルージングを行ったが、やはり霧でここでも北方領土を観ることはできなかった。天気予報によると羅臼町では午後に少しだけ晴れ間があるとのこと。午前11時ごろに尾岱沼を後にし、知床半島へと北上した。標津町のあたりから徐々に晴れ始め、根室海峡の先にはおぼろげに稜線のようなものが見えてきた。あれが国後島だろうか？羅臼町では地魚である「ほっけ」に舌鼓を打った後、羅臼国後展望塔へと向かった。展望塔の入口で管理人の方が、「ほんの1時間まえなら曇っていましたよ」との声。参加者全員で展望塔へと登る。すると、眼前にはくっきりと国後島が見えた。新潟と佐渡島の最短距離が34キロ、それよりも8キロも短い距離に国後島が浮かんでいる。群馬県という内陸部に住んでいた私にとって、日本のボーダーを意識したのはこれが最初の経験であった。外国人参加者も国後島の島影を写真に収めていた。

かくして、現場の視点から北方領土問題について学び、実際に日本のボーダーを体感するという巡見の目的は達成された(と思う)。首都圏に住んでいると、実際にボーダーの現場に住んでいる人々、現場で粘り強く領土問題に取り組んでいる方々の視点はほとんど見えてこない。今回の巡見は、自分自身の北方領土問題に関する認識を新たにすることができたという意味で大きな経験であった。そして、外国からの参加者にとっては、日露間の領土問題について体感する中で見聞を深めたというだけでなく、各人が研究する境界問題との比較材料を得たという意味で貴重な経験だっただろう。

最後に、二ホロ、歴史と自然の資料館、納沙布岬の北方館等の訪問アレンジ、根室市内の宿舎留保等で根室市役所には大変お世話になった。我々が訪問した日の前後には領土問題に関連する大規模行事・ロジが行われており、本当にご多忙な中、夕食会に(そして、その後も)出席いただいた根室市役所の方々に心より感謝申し上げる。



地田 徹朗 (GCOE 学術研究員)